



東九州支部報



23年度定期総会（大分市・コンパルホールにて・平成23年4月16日・講演会終了後撮影）

《 も く じ 》

23年度定期総会	1
支部長就任あいさつ	2
23年度の月例山行	3
尾崎山	3
私の初登山	4
久住山	5
遙かなる山の呼び声に	5
私の無名山ガイドブック	45
お知らせ	7
後記	8

平成二三年度定期総会を開催 新しい半世紀の歴史づくりへ

平成二三年度（2011年度）東九州支部定期総会が、さる四月一日（土）、大分市府内町の「大分市・コンパルホール」視聴覚室」で、支部会員、会友五七名（うち本人二七名、委任状三〇名）の出席で開かれた。開会のあと、議長に首藤宏史会員を選出し議事が進められた。

最初に梅木支部長が「五〇周年記念事業はみなさんの協力で成功裡に終わり、本部からも『大変よかった』とお褒めの言葉も頂いた。五〇年という人生で言えば節目を終えたわけで、この総会は五一年目という、新しい半世紀への第一歩の年の、スタートを着る大事な会と言える。本部も、公益法人へ向けて新しい会のあり方を追求しなければならぬ時に来ており、支部もそうした中で、これまでとは違った視点で新しいものを作り出していく支部活動にしていく、スタートの総会となる」とあいさつした。

この後報告事項に入り、西事務局長から平成二二年度事業報告、加藤会計から二二年度一般会計決算報告及び、五〇周年事業の特別会計報告がなされ、続いて安藤監事から会計監査報告があった。これらについては全て全員の拍手で承認された。

続いて議題で、はじめに梅木支部長が二三年度事業計画（案）の提案説明があった。この中では特に、公益的事業の取り組みを、今後一層積極的に進める必要がある、これまでの取り組みに加えて、登山教室や登山指導など外部に対する働きかけをすすめることや、『山の日』制定運動を幅広く展開するため、実行委員会などの組織化も考えていることが説明された。また、日本山岳会全体の課題でもあるが、会員の高齢化と減少傾向の中、会員の拡大が避けて通れない課題となつて

おり、『一人一会員拡大』をモットーに取り組み必要があることなどが提案された。

次ぎに加藤会計より平成二三年度会計予算案が提案され、この中では特に、本部における公益法人化のための諸制度改革の流れの中で、これまで本部から会員の人数配分で下ろされてきた助成金制度が今年度から無くなり、支部の公益的の実績に依りて配分がなされることになり、その配分がどうなるか不明のため、と

りあえず例年どおりの予算を組んでいるが、実際に本部よりの配分が決まった時に補正したい旨の提案説明があった。これら事業計画(案)と予算(案)は提案どおりに拍手で決定された。

総会終了後のアトラクションは、今年は梅木支部長が「大分の山・よもやまばなし」と題して講演を行った。このなかで、特に大分の山が山岳信仰との関連が深いことや、火山や石灰岩が多い地質や、地形の特徴などについて、約一時間にわたっての興味深い話であった。

梅木支部長勇退・後任に 加藤新支部長を選出

総会では役員の変更もあり、昭和六二年から二四年間支部長を務めてきた梅木支部長が登壇し「五〇周年記念事業を終え、歴史の一つの節目を越えたこの時期、新しい体制でスタートさせたいと

思っており、支部長を辞任したい。また、長年事務局長を務めた西会員も退任したい意向であり、宇津宮、佐藤両副支部長も一緒に退任したいという意向であるので、この際三役を一新して欲しい。そこで、私の後任には加藤会員を推薦したい」と提案があり、全員の拍手で承認された。

この後、新支部長に選ばれた加藤会員があいさつに立ち、「先輩の築いた支部の歴史をふまえ、公益法人としての新たな視野に立った活動など、支部活動の一層の活性化に向けて支部員の一層の活下で進めていきたい」と抱負を述べ、あらかじめ梅木支部長より新支部長へ推挙の意向が伝えられて以来考えていた、他の役員人事の構想が示され、提案どおり新役員が承認された。選ばれた新役員は次のとおり。(文責 飯田)

支部長	加藤英彦(8765)
副支部長	興田勝幸(8414)
常任委員	甲斐良治(8940)
委員	飯田勝之(10912)
	阿南寿範(9169)
	安東桂三(9193)
	木本義雄(12019)
	西 あずさ(12347)
	佐藤秀二(13141)
	中野 稔(13997)
	久保洋一(14168)
	下川幸一(15404)
	星子貞夫(8682)
監事	首藤宏史(8695)

(数字は会員番号)

支部長就任に当たって

加藤 英彦 (会員番号8765)



日本山岳会東九州支部は昭和三五年に全国で一六番目の支部として発足しました。その間二〇、三〇、四〇周年と回を重ね、昨年一月に支部創立五〇周年の記念事業を成功裡に行ったことはまだ記憶に新しいところでもあります。今日までの五一年の間に支部長は、初代 永井清一氏(835~836)二代目野口秋人氏(837~838)三代目梅木秀徳氏(862~811)と僅か三人の支部長の歴史をみてきたのであります。しかるに今回も梅木支部長が当然、終身支部長として読まれていくものと思っております。

ところが、総会を前にして突然支部長を交代したいという申し出がありました。今回の役員改選を前に、私に次期支部長をという提案でした。まさに指名された事となりました。支部長という重責を引き受けるにあたって私より他に適任者がいるのではないかと、諸先輩の方がいるのではないかと思いましたが、しかし指名されたものを断るわけもいかに、今回その重責を引き受ける気持ちとなりました。昨年の五〇周年記念事業は支部が結束するに大変有意義な事業であったとおもいます。がそれでも正会員の四五%に当たる三〇名の方は何の協力もありませんでした。

そこで会員の皆様への提言です。「自分はこうして日本山岳会に入会したのか」という事を聞きたいと思えます。原点にかえて、入会当時を振り返ってみてください。入会するにあたっては入会申込書に記名しその中に山歴を書き入れたはずで、紹介者二名がいないと会には入れません。貴方の入会申込書には二名のかたの紹介者が書かれていたはずで、何よりも皆さんは希望に満ちてこの会に入会してきたはずで、一つの高尚な趣味の会の門をたたいたはずで、しかるにいまでもその当時の気持ちを維持できていますか。要するに自分の山に対する気持ちをいまでも持ち続けていますかということをお聞かせください。自分が会に入っている意義を聞きたいのです。原点にかえて考えてみてください。「自分がなぜ日本山岳会に入っているのか」を。

さて現在会は大きな問題をかかえております。皆さん毎月届く会報「山」をご覧になっていると思えます。その(一)会の法人化という問題です。三月二日行われた通常総会において会は「公益法人」を目指すという決定がなされています。新しい名称は「公益社団法人日本山岳会」として平成二四年四月一日スタートすべく、今後準備のための事務手続をすすめていく方針のようです。従ってその一支部である我々支部員も、その趣旨にのっとたかたちでの意識をもって行動しなければならぬと考えておいて下さい。会としての理念は変わらないと思えますが、変わっていく部分もあるところです。特に会計面で変わっていくようで、現状での助成金制度も大きく変わっていくようです。詳細にわたっては今後の会合等で伝達されるものと思えます。皆さんにもそのつど報告できると思いますが、その(二)「山の日」制定の件です。これはすでに各種山の団体とも連携をとって、山の日制定プロジェクトを発足させています。国民の休日としての「山の日」制定に理解しその運動にすこしでも関わっていくことにご協力ください。その他「会友制度」についても各支部で討論されているように

本部でも統一された形が検討事項のようです。見守っていききたいとおもいます。

次に支部内部についてです。梅木支部長におかれましては二四年間という長い間ほんとうにご苦労さんでございました。そして支部長交代とともにコンビを組んでいました西孝子常任委員(事務局)も退任です。それと副支部長二名、監事二名という会のトップの役員の方々の大幅な交代です。西事務局長は梅木支部長より長く、三十数年という長い間の事務局のお勤めでした。まさに支部の生き字引といった存在でした。そこで会の今後の新役員人事についてですが、一任されて私なりに考えてはおりますが詳しくは次号の会報にて発表いたします。ただ常任委員(事務局)については会を熟知しており実績のある飯田勝之会員におねがいしました。

「月例山行」は従来どうりの形で続いていってよいとおもいますが、計画書を作つての山行を最低でも年一回は必要と思ひます。合宿形式の山行が必要でしょう。「支部報」については内容は従来どうりでよいと思ひますが印刷、製本を外注にしたらどうでしょうか、予算との関係になると思ひます。その他様ざまな問題が生じるおもいますが新役員にて会談をかさねながらの解決です。さて今度の交代から最初に取り組む大きな行事のおねがいで。第一五会植村直己冒険賞を受賞された栗秋正寿さんの講演会を企画しました。こういった講演会はさきほど申し上げた本部のめざす「公益社団法人」の行事の一環です。七月九日(土)午後二時よりコンパルホール文化ホールを予定しています。詳細は後日お伝えしますが新体制になつての初めての企画です。みなさまのご協力、そして結束をおねがいたします。

つぎに青少年登山教室です。これは従来どうりで七月二四日(日)です。今年は一〇回目となります。何か記念となるような行事をとかがえております。支部の活性化についてはいろいろな行事を企画することで参加者の増加を図っていくことで進めて行きたいと思ひます。まだまだ様ざまな事で会員皆様方へのおねがいたします。今後とも支部の活性化を図るとともに支部員一ひとりの意識を高め、支部としての結束をおねがいたします。なにもかもないことあるうかとおもいますが今後ともよろしくおねがいたします。以上簡単ではございますが新支部長就任のご挨拶といたします。

三年度の月例山行

今年度の月例山行は「県内と九州の島の山に登ろう」がテーマです

- 五月 天草の山：倉岳(682.2m)、次郎丸岳(397.1m)、ほか
- 六月 蒲江町・屋形島、屋形：竜王山(198.7m)、深島(98.0m)、南深島(79.8m)
- 七月 対馬：御嶽(479m)洲藻白嶽(519m)、矢立山(648.5m)、有明山(658.2m)、竜良山(658.5m)ほか
- 八月 姫島：矢筈岳(266.6m)他
- 九月 佐伯市・大入島、八島：久保浦(193.7m)、高松(173.9m)、八島(98.0m)
- 一〇月 五等列島：鬼岳(315m)箕岳(44m)、父ヶ岳(160.8m)、御嶽(439.2m)ほか
- 十一月 屋久島：宮之浦岳(936m)、永田岳(886m)
- 十二月 津久見市・保戸島、黒島、沖無垢島：遠見山(178.6m)、南黒島(84.6m)、沖無垢島(42.4m)
- 一月 臼杵市・葛島、黒島、津久見島：羅洲(64.4m)、北黒島(27.2m)、津久見島(166.2m)
- 二月 奄美大島：湯湾岳(694.4m)、南郷山(307.1m)、ヤクガチョボン岳(440.6m)など
- 三月 鶴見町・大島、高手島、米水村・横島：大島(93.3m)、船隠(130.9m)、高手島(30.2m)横島(38.4m)
- 四月 平戸島：志々伎山(347m)

(県内以外の島は一泊以上の山行となります)

月例山行報告

尾崎山(1438.2m)

(一)月月例山行

宮本真理子

二日は六時前起床、テントをたたみ、それぞれ朝食を摂り、七時過ぎ、尾崎山に向けて出発する。

当初の計画は、山頂直下に通じる林道を車で行って登り始める計画であったため、GSに上尾崎山まで二、七百地点の県道より車にて林道に入るも、積雪深く、タイヤが空回りして前に進めず。

バックにて元の県道に戻り、大河内越からのルートに変更となる。九大演習林の看板がある三方岳登山口の、峠の駐車場に車を止める。

風の吹き溜まりのためか車を降りると五〇分程のパウダー状の積雪に足を取られる。皆、装備を完全に整え、各々でストレッチを済ませ、西さんに留守を頼み、八時一〇分登山開始。

いきなりの急登にあえぎながら八時三〇分、三等三角点(224.3m)のある稜線のピークに辿り着く。スズタケの立ち枯れが目立つ稜線を四〇分程進む。途中からは北東方向になだらかな尾崎山の稜線が見えてくる。

ナラやヒメシヤラ、ブナ等の広葉落葉樹の中を登るにつれ、少しずつ積雪が深くなる。しばらくすると目の前から忽然と登山道が消え、覆いかぶさったスズタケが雪の重みに耐えきれず、行く手を塞ぎ、先頭を行く久保さんを見失ってしまふ。

木の枝に見え隠れする赤いテープを目印に、深い雪に足を取られ

私の初登山

甲斐 一郎

夏休みの中頃、村の青年団が由布山に登る計画をしていた。その時叔父もそのメンバーであった。私も登りたいと叔父を介してお願した。その時私は小学校五年、十一歳であった。小学生だから体力的に心配はあったが、叔父もいることだし何とかなるだろうと認めてもらえた。

コースは自宅↓詰↓小平↓東山↓合棚↓城島↓猪ノ瀬戸↓山頂

出発は村の青年団長宅を午後九時、翌朝頂上で日の出を見て帰るといふ計画であった。午前十時には帰宅するから弁当はいらない。水は川があるし、出来るだけ飲まない方がいいから水筒も持たない。夜間行軍には明かりは使わないから懐中電灯は持たない。まさに、軍事訓練を考えての行軍であった。暗い林の中を歩く時には、下を見て歩かず、上を見て、空や星の見えるところを歩けばいい。その道路があるから、と教えてくれた。

このようにして山に入った。暗い夜道を歩きはじめて、次第に明けていく山道。私にとっては何もかもが初めての経験であった。見たことのない景色、聞いたことのない小鳥のさえずり、虫の声……。頂上に四時頃着いた。頂上の景色もまたすばらしい。これもまた、私がこれまで目にしたことのない日の出前の幻想的な景色である。この幻想的な景色の魅力が、私を山に引きつけることにつながった。

でも大変寒かった。八月中旬なのに寒さで震えた。「寒いか？火を燃やしてやろう」と言って青年団の人が、そこらにある木の枝や木片を燃やしてくれた。よく燃えてとても暖かかった。その後、戦後だが、私は山によく行くようになり、キャンプをして、炊事をしたり、キャンプファイアーなどで薪を燃やすことがよくあったが、あと時のようには良く燃えたことがない。それには、一寸したコツがあるのだが、そのことは後日の話題にしよう。

しかし、頂上の寒かったのには、私は本当に懲りた。戦後、幾人かと一緒に由布山に登るため、岳本にキャンプしたことがある。その時、溝口岳人翁から明日の予定を聞かれた。私は「早く登って日の出をおがみたい」と答えた。すると翁は「一番悪い山登りだ」と言う。それには理由がある、山登りは頂上の景色が一番いい。内容が一番完備している。だから、時間のゆるすかぎり頂上について、英気を養うべきだと指導をうけた。なるほど頂上にいる時間が十分にある方がよい。それ以来私は、日の出を観ることを目的とした登山は考えないことにした。

山はいつが良いかとよく問われる。私は、山はいつでもよい、山のその時の良さがあるから比較は出来ない、と答える。いつでも山はすばらしい。また『山を征服した』という言葉を使う人をよく見かけるが、その言葉を使うべきではではない。小さな人間が、山の大自然を征服できるわけがない。自然を愛し、自然と親しみ、自然と共に生きていきましょう。さてこのペンリレー、次号は三浦敬志会員にお願いしましょう。

(前号・第三回「高山病・初体験の苦い思い出」の執筆者の氏名が抜けていましたが加藤英彦さんでした)

一時間半、尻餅を何度も付きながらの藪こぎ行軍である。



(尾崎山山頂にて)

へたばりかけた頃の一〇時五〇分、「一四三九m・尾崎山」のプレートと三等三角点がいきなり目に飛び込んでくる。スズタケに覆われた山頂は座る場所とてなし。記念撮影のあと、立ったままの昼食となった。

山頂の少し南の斜面に藪を分けると、遙か彼方に白い九重連山、その左に目を移せば黒い根子岳、白の高岳を望むことができ、近くには黒岳から扇山、さらに左に国見岳と向霧立の山々を間近に見ることが出来た。

一一時二五分下山開始。積雪の藪こぎは足を取られる。途中、右大腿部に違和感あり不安であったがしばらくするとそれも納まる。一三時一〇分、西さんの待つ登

大河内越の峠に無事下山する事が出来た。西さんに初の積雪付きの藪こぎデビューを報告する。

参加者：西、飯田、中野、久保、牧野、石川、宮本

尾崎山：耳川・小丸川・一ツ瀬川源流

(2011.1.22~23)

久住山(1787m)

(二月月例山行報告)

牧野信江

二月二〇日(日)午前六時、中野車でサニー出発。今月の月例山行・源流の山は大野川、大分川、筑後川の源流となる久住山です。午前七時過ぎ、赤川登山口に到着。駐車場の横の、何本もの木には大きな樹氷が残っていました。

七時半に出発。雪がかなり残っていて、登りはじめてまもなくアイゼンを装着する。林道を過ぎて急斜面の連続。一步一步雪を踏みしめて上ります。雪が深くて、岩などの凸凹が減っているのは歩きやすいが、歩くスピードは遅くなります。

一〇時半に山頂到着。天気は薄曇りで、風もなく、寒くなくてち

ようと良い登山日和。高曇りで空気が澄んでいて遠くまで見渡せま

す。遠く、四国の山や山口県の山が見えています。飯田さんが「久住山から四国の山を見ることはあるが、中国の山ははじめて見た」と言っていました。阿蘇方面を見ると、大地は冬枯れて焦げ茶色です。広い、広い久住高原が雄大

です。



(久住山頂にて)

一時に下山開始。予定はピストンでしたが、天気も良いので南登山口へ下りることにしました。久住山と稲屋山との鞍部への下りは深い雪の上を、アイゼンをきかせたの、快適で楽しい歩行です。私にはとっても新鮮でした。でも、転んだらずつと下まで滑ってしま

沈んでしまうところがたくさんあり、先頭を歩く飯田さん、ご苦労様でした。久住山頂からずつと、私たちの少し後を下りていた一人の男性、休憩中に追いついて、話を聞くと自分が下りているコースが分からないうです。牧ノ戸峠から登ってきたが、仲間と離れて、登ったコースを下りていると思つたが、様子が違うと言う。現在地を教えると、立ち止まって友人に携帯を入れていました。その人とも分かれて、樹林帯に入る前の一二時一五分、昼食休憩をとる。樹林帯にはいると雪も少なくなり、道ばたに石の観音様が置かれて七曲がりアイゼンをはずす。猪鹿狼寺本堂跡を過ぎて少し下りたところに、新しい広い林道が出来ていて、これを横断。その少し先で、右に分岐がありま

した。直進はくじゅう花公園、南登山口方面へ、右は赤川登山口へのトラバースルート。入り口に「赤いテープを見て行くように」と注意書きの大平工業のオレンジのプラスチックプレートがあります。真っ直ぐ下ってロードパークの道を赤川温泉まで歩く予定でしたが、変更してここを右折。少し行くと、道からすこしはずれた木の枝にリュックサックが一つぶら下げられてあり、ちよつとミステリアス。「近くに白骨死体があるんじゃないか」と飯田さんが冗談。曲がりくねったゆるいアップダ

ウンの道が続く。途中で二カ所、「危険・立ち入り禁止」と札が下がっているが、外に道はない。直進するが何もない。「危険」の意味が分からない。まもなくコンクリート舗装の林道に出て、その林道を下ればまもなく赤川登山口に出ました。

参加者：西、飯田、中野、牧野

星子貞夫

期日：2010/6/22~7/4

メンバー：星子貞夫、松井豊三、今山アヤ、永井邦子、坂本映子、雪野佐喜子、伊賀上清香、荒金幹子、滋野マチ子、梅香家鎮、梅香家成子、小笠信代、清水道枝(敬称略)

場所：パンフ国立公園、ヨール国立公園、アシニポイン州立公園、コロンビア・アイスフィールド、ラジューム温泉

それは2008年、アルプス・トレッキングの打ち上げ会食の時に始まった。

次はカナダに行くぞ。

2009年12月アシニポイン・ロッジの予約がとれた。キャンモア在住のオガワ氏のお陰である。

それから半年、二回の会合を経て2010年5月13日に筋湯の温泉で最後のミーティングをする。激しい雨のため翌日の登山は中止した。雨降って地固まる。

6月20日

待ちに待ったその日が遂に来た。朝から小雨模様の天気である。8時10分発のソニックで大分を離

れ、福岡空港発13時5分の全日空NH244便、成田空港行きにチエクインする。

別便で発送してある荷物を受け取り、X線検査を通し搭乗券を受け取る。全世界共通の飛行機搭乗の流れであるが、いつも緊張の連続で汗をかく。

今回清水さんがバンクーバー経由となり、その荷物も直通組が受け持つ、初めての海外一人旅をサポートする。

今年からエヤー・カナダが成田ーカルガリー直通便を運航するようになり便利になった。

成田空港でCAD\$に交換する。レートはICADに対し手数料込み¥96.90であった。

エヤー・カナダAC010の機内はほとんど日本人で日田市出身の客室アテンダントが居て、懐かしく話はずむ。

成田を16時00分に離陸し、日付変更線を通して30日10時45分にカルガリー空港に着く。時差は13時間である。

空港でB&Bモナークのオガワ氏の出迎えをうける。

電話で話した事はあるが初対面である。童顔のがっちりした御仁である。

案内に従って構外に出て全員の荷物をチャーリ(オガワ氏のセカンド・ネーム)の車に積み、バジエント・レンタカーの手続きをする。15人乗りのフォード車である。

ちなみに返却時のメーターは総



走行距離2157マイル(3471.26Km)でガソリンの使用料は289.81リットル当たり12キロであった。

チャーリの先導に従い、松井氏の慎重な安全運転でカルガリー市内を抜け、スキージャンプ台を左に見て、只ひたすら1号線を西に10km走る。周囲は水平線まで続く広々とした草原で所々牛が草を食んでいる。1時間も走るとやがて前方に雪で縁取られたロッキーの山波が見えてきた。

今回季節が1ヶ月早いので山々の地層のくぼみに残雪があり、盛り上がった岩の塊が山としての表情を見せている。ロッキーはその名の如く岩の山である。

キャンモアは人口約1万人バンフまで23kmの炭鉱の町でランドル・マウンテンを隔てたバンフの隣町である。

B&Bモナークは標高1300mの

キャンモア中心部から歩いて40

分位、で、国道1号線を見下ろす丘の上にある。正面からスリー・シスターズがいつも見下ろしている。リトル・シスター(2694m)ミドル・シスター(2769m)ビッグ・シスター(2936m)の三姉妹である。

部屋割りは一階Wに梅香家、夫婦、ツイン2部屋にそれぞれ男性が星子、松井、女性が雪野、清水そして2階はシングルと布団の部屋に伊賀上、荒金そしてツインに今山、滋野、トリプルに坂本、永井、小笠として収まった。モナーク始まって以来最大の13名の

大所帯に合わせたような部屋制であった。つまりW、ベッド嫌いの伊賀上さんに布団一つ、と言う具合である。お陰でチャーリは自室を明け渡し、大型テレビのある居間のソファに寝る事になった。

部屋割りは一階Wに梅香家、夫婦、ツイン2部屋にそれぞれ男性が星子、松井、女性が雪野、清水そして2階はシングルと布団の部屋に伊賀上、荒金そしてツインに今山、滋野、トリプルに坂本、永井、小笠として収まった。モナーク始まって以来最大の13名の

大所帯に合わせたような部屋制であった。つまりW、ベッド嫌いの伊賀上さんに布団一つ、と言う具合である。お陰でチャーリは自室を明け渡し、大型テレビのある居間のソファに寝る事になった。

部屋割りは一階Wに梅香家、夫婦、ツイン2部屋にそれぞれ男性が星子、松井、女性が雪野、清水そして2階はシングルと布団の部屋に伊賀上、荒金そしてツインに今山、滋野、トリプルに坂本、永井、小笠として収まった。モナーク始まって以来最大の13名の

大所帯に合わせたような部屋制であった。つまりW、ベッド嫌いの伊賀上さんに布団一つ、と言う具合である。お陰でチャーリは自室を明け渡し、大型テレビのある居間のソファに寝る事になった。

部屋割りは一階Wに梅香家、夫婦、ツイン2部屋にそれぞれ男性が星子、松井、女性が雪野、清水そして2階はシングルと布団の部屋に伊賀上、荒金そしてツインに今山、滋野、トリプルに坂本、永井、小笠として収まった。モナーク始まって以来最大の13名の



私の無名山ガイドブック45

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その⑩)

今回は豊後大野市旧犬飼町にある、人里近い里山の稜線歩きを二つ紹介しよう。

「家ノ棟」

(5674-310.1m)

芝北川の南に連なる稜線は、旧犬飼町と千歳村との境界をなしており、その最高地点がこの峰である。その名の通り、低い丘陵状の山が連なるこの付近では目立つ峰で、低いながらも鋭峰を見せている。

県道中土師犬飼線の千束バス停から千歳に通じる市道を入ると、約650mで左(東)に入る林道千束葛線がある。これを上ると、約800mで右(南)に入る荒れた作業道がある。これを登ると、ヒノキ林の中を曲がりくねって登ると約一〇分で左手に灌木自然林の小稜線があらわれる。この稜線にとりつき、やや急な稜線を直登すると、約一〇分の登りヒノキの中の平らな山頂につき、その中央に三等三角点がある。市道から林道千束葛線を入らずにおお六〇〇m行くと峠の観音堂前に達しする。

(以下次号)

ここより東に、稜線伝いに古い道を行くと、緩い植林地の中のアップダウンで約四〇分で達すること出来る。付近はほとんどスギ、ヒノキの植林地で山頂もヒノキの中で展望はないが、林道から登る小稜線は照葉樹の多い灌木林で、このあたりでは心地よい稜線だ。



(家の棟)

りくねった稜線が、二〇〇mのコンタを割った最初のピークがこれで、以東はさらに下がって大野川に落ち込んでいる。

犬銅市街地から芝北川に沿って宇津尾木に抜ける道を行くと、農免道路の先に三叉路がある。ここより山田に抜ける道を行くと約1.3kmで山ノ田につく。最初の民家への入り口がとりつき点。植林地とクヌギ林の堺に古い山道が掘り割りで続いている。これをたどると、ジグザグ登りでやがて左ヒノキ、右天然林の間を行き、三、四分で右ヒノキ、左天然林となる。さらに三、四分で道が尾根の左(南)を巻くようになっていく。このあたりから右のヒノキの急斜面を登ると三、四分で三等三角点のある頂に着く。

付近は植林地が多いく、南はヒノキの植林地、北に続く照葉樹林は二次林であるがかなり成長し、小鳥の声が多く、人里に近いにもかかわらずちよつとした深山の面影を漂わせている。

・参考コースタイム 作業道入口→一〇分→稜線とりつき→一〇分→三角点

・2万五千分の1地形図名 田中

・参考コースタイム 市道→一五分→山頂

・2万五千分の1地形図名 田中

「栗野」 (vs6・197.6m)

芝北川と宇津尾木川に挟まれて、三ノ岳から東に派生する曲が



(栗野)

お知らせ

五月月例山行の

ご案内

- ・月 日：五月二八(土) 二九日(土)
- ・目的地：天草の山(天竺、行人岳、倉岳、白岳ほか)
- ・出 発：五月二八日(土) 午前四時サニー出発
- ※ 野営できるよう、テント、シユラフ、食糧等を準備のこと。

六月月例山行の

ご案内

- ・月 日：六月二六日(日)
- ・目的地：蒲江町の屋形島、深島の山(竜王山、深島、深島南)
- ・出 発：六月二六日(日) 午前五時分サニー出発

食糧計画は参加者で協議調整します

七月月例山行の

ご案内

- ・月 日：七月三〇日(日) 三一日(日)
- ・目的地：対馬の山(白嶽、矢立山、有明山、御岳ほか)
- ・出 発：七月二九日(金) 大分駅発二〇時一二分(ソニック六〇号)を予定
- ※ 野営や食糧計画、レンタカー計画など、参加者で協議・調整します。

八月月例山行の

ご案内

- ・月 日：八月一四日から一七日の間(姫島踊り見物兼ね)
- ・目的地：姫島の山(矢筈岳、達磨山ほか)
- ・出 発：当日午前六時サニー出発
- ・現地集合：伊美港午前八時

九州五支部集会の参加者募集

九州五支部集會について、今年度担当の熊本支部から案内が来しました。大分から近い、阿蘇で行われますのでできるだけ多くの参加をお願いします。

- ・時期：六月四日(土)～五日(日)
- ・場所：阿蘇いこいの村 阿蘇市蔵原1420 TEL0967-34-2151

日程

- ・四日 一三時：受付 一五時：開會
- ・五日 一八時：懇親會 記念山行 杵島岳・往生岳・他
- ・参加申し込み締め切り 五月一六日(月)まで
- ・申込先 支部事務局 飯田勝之 TEL0977-21-3437 090-2503-8409

第一〇回青少年

体験登山大会

今年は一〇周年記念の大会となります。節目の大会として、盛大に盛り上げたいですね。たくさん青少年を誘って下さい。青少年でなくても、一般の参加者も歓迎しますので、呼びかけて下さい。



・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？

・お分かりの方は事務局まで はがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで、正解多数の場合は抽選します。)

・締め切り 六月末日

※前回の正解は越敷岳から阿蘇山を撮ったものでした。

・月 日：七月二四日(日)、

支部役員会の

開催について

・登る山：久住山
 ・コース：牧ノ戸峠から久住山
 ・大分駅前からバスで送迎します。
 ・詳しい計画は後日、会員宛お知らせしますが、あらかじめ知り合いたい方は、お気軽にお知らせ下さい。

第二回
 日時：五月二六日(木)
 午後六時から
 場所：大分市府内町
 「コンパルホール」

第三回

日時：六月二四日(金)

午後六時から
 場所：大分市府内町
 「コンパルホール」

※各役員には別途案内状を出します。ぜひ席して下さい。

後記

○ 春が近づいて、何時までも冷たい風が吹き、咲きかけたサクラがなかなか開かなかった、今年の春。

○ 思い出すと去年は、咲いた後に寒さが続き、何時までも花が散らなかつた。

○ 気候の不順が続く近年。東日本の大地震は気象変動とは関係

ないのかもしれないけど、異常な出来事は何か関係があるので、はと思いたくなる。

○ 支部定期総会で、長年支部長と努めた梅木会員が勇退。終身支部長と決め込んでいた多くの会員にとっては寝耳に水。

○ 五〇周年を終えた期に、人身を一新、若返りを図ると言われたが、考えてみれば後任もさほど若くはない。せめて、気持ちと行動だけでも若さを出し、若い力を誘い込みたいものだ。

(K・I)

栗秋正寿 第15回植村直己冒険賞 受賞記念報告会

と き：7月9日(土)午後2時より
 と ころ：コンパルホール「文化ホール」
 会 費：1,000円

栗秋正寿 (くりあきまさとし)
 1972年日田市生まれ。九州工業大学卒。
 98年冬季マッキンレー単独登頂ほか。

※支部主催の公益的事業として、実施することになりました。広く一般の山の愛好者、あるいは、冒険・探検愛好者、そしてまったく一般の人たちにも、大分県が生んだ若き挑戦者の体験談を聞いてもらいたいのもです。会員・会友の参加はもちろん、知人・友人も多数誘って参加して下さい。

主催 日本山岳会・東九州支部
 後援(依頼予定) 県教育委員会、大分県山岳連盟、大分合同新聞、NHK、OBS、TOS、OAB、FM大分
 協力 山のいで湯愛好会

日本山岳会東九州支部報 53号

2011年(平成23年)4月25日(月)
 発行者 加藤 英彦
 編集者 飯田 勝之
 発行所 〒874-0820
 別府市原町5-14
 飯田勝之方
 TEL・FAX 0977-21-34377
 題字 (故)佐藤正八